

2023 年 9 月 17 日（日）「その冠を投げ出して」

ヨハネの黙示録 4:1-11（その 3）

1 その後、私が見ていると、開かれた扉が天にあった。そして、先にラツパのような声で私に語りかけた、あの最初の声があった。「ここへ上って来なさい。そうすれば、この後必ず起こることをあなたに示そう。」2 私は、たちまち霊に満たされた。すると、天に玉座があり、そこに座っている方がおられた。3 その座っている方は、碧玉や赤めのうのように見え、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。4 また、玉座の周りに二十四の座があり、それらの座には白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。

5 玉座からは、稲妻、轟音、雷鳴が起こった。また、玉座の前には、七つの松明が燃えていた。これは神の七つの霊である。6 また、玉座の前には、水晶に似たガラスの海のようなものがあった。この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。7 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その表にも裏にも一面に目があった。それらは、昼も夜も絶え間なく唱え続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」

9 これらの生き物が、玉座に座り、世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉れと感謝とを献げる度に、10 二十四人の長老は、玉座に座っている方の前にひれ伏し、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、その冠を玉座の前に投げ出して言った。11 「私たちの主、また神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、万物はあなたの御心によって存在しました造られたからです。」

【序論】

私たちは、限られた時間と空間の中で、「最上の礼拝」をささげようと集まっています。この礼拝が主の御前に真実であるかどうか、常に問われています。礼拝堂に入る前、私の胸に迫ってくるいくつかの問いがあります。心はふさわしい状態にあるか、奉仕への備えにぬかりはないか、隣人との関係は整えられているか。いろんなことを思い巡らしながら礼拝の時間を迎えます。どれを取っても不完全な自分の姿を自覚しながら、その上でベストを尽くせるように祈ります。

黙示録 4 章に描かれている「天上の礼拝」を見る度に、「四つの生き物」と「24 人の長老」がささげる礼拝に圧倒されてきました。ここに真の礼拝の姿がある。この礼拝に学び、これに一步でも近づき、彼らと一つになって地上の礼拝をささげたい。やがて私たちも罪から解放され、真に純粋な礼拝をささげられる日が来ることでしょう。その日を待ち望みつつ、地上にあつては明日という日はないと思って、この時を最上の瞬間にしたいと思います。

【本論】

本論 1. 礼拝を導く四つの生き物

これらの生き物が、玉座に座り、世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉れと感謝とを献げる度に、(4:9)

「四つの生き物」が「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方」と絶え間なく賛美している様子が、8節に書かれていました。9節には「栄光と誉れと感謝」という三つの要素が出てきます。これらは同列に並べられていますが、少し質の違いがあります。

「栄光」と「誉れ」はほとんど同じ意味で、本質的に神に備わっているもの、神にこそ帰されなくてはならないものです。地上にあっては、人間がそれらを何らかの意味で横領したような状態にある。自らを神と呼ぶ者、神ならぬものを神とする者、人生の主権を手放さぬ者。しかし聖書の啓示によって、私たちはこの人生を与えてくださった方がいたということを知るようになりました。その方にこそ「栄光と誉れ」は帰されなくてはなりません。実は、今日の箇所は「神の創造の御業」と深く結びついていることが分かります。11節を見ると、「あなたは万物を造られ、万物はあなたの御心によって存在しました造られたからです」と書かれています。神はなぜ賛美されるべき方なのか。それは、生きとし生けるもののために万物を創造し、良きもので養ってくださっているからです。良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださっている(マタイ 5:45)。誰もが「創造主なる神」を知り、「いのちの与え主」として賛美すべきであります。賛美は被造物の目的だからです。

創造主を知るとき、私たちの心には「感謝」が生まれてきます。見えない神様に感謝しながら生きる姿には、人間の本来のあり方が取り戻されているため、美しさがある。不平不満を言うことは簡単ですが、それはどうしても美しくは見えない。どんな状況下にあったとしても感謝をささげることが信仰者にはできるのです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。(I テサロニケ 5:16-18)

私たちは「どんなことにも感謝」できる人生へと導かれました。これは、神を知った者に与えられる幸いな生き方なのです。神は、私たちがどのような境遇にあっても生き抜く知恵を与えてくださる。

本論 2. 長老たちの礼拝

二十四人の長老は、玉座に座っている方の前にひれ伏し、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、その冠を玉座の前に投げ出して言った。(4:10)

「四つの生き物」(御使い)の賛美を受けて、「二十四人の長老」がそれに呼応するかのよう

に礼拝へと導かれていきます。彼らの姿勢に注目しましょう。「ひれ伏し」「その冠を玉座の

前に投げ出して」と言われています。まさに、額を地につけて神を拝する。これは、厭々ながら平伏するというのではなく、あまりに偉大なる方を前にしてそうせすにはおられないということです。天国に招き入れられた者には一人ひとり洩れなく王冠が与えられます。それは、神の国の王／王妃として治める特権にあずかっていることの証です。神の子イエスの兄弟姉妹として、神が与えてくださる。しかし、礼拝するとき、長老たちは頭に載せられた冠を外し、その栄光を神に全くお返ししてしまう。そのような身分が得られたのは自分の力によるのではなく、主イエスのいのちが投げ出されたことによるからです。二十四人の長老とは、すべての聖徒たちの代表であり、その背後には多くの神の民が連なっています。長老たちが行なうように、他の人々も王冠を外し、それに固執することなく、神の御前にひれ伏しているに違いありません。

この王冠は不思議なもので、被せられた者は「自分には畏れ多い」と考えて外してしまうのですが、それでも再び頭に載せられるのです。主イエスを通して与えられた栄光の冠は、私たちがへりくだればへりくだるほど輝きを増し加えます。

本論 3. 創造主への賛歌

「私たちの主、また神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、万物はあなたの御心によって存在しました造られたからです。」(4:11)

ここで長老たちが神に帰している三つの事柄、「**栄光と誉れと力**」が、9節で「四つの生き物」が言っていた「**栄光と誉れと感謝**」と若干異なる点に注目しましょう。「感謝」に対して「力」。これは、神を支配者として認めることが意図されているのであって、地上の如何なる支配者も神の御前にひれ伏すべきことが暗示されています。本節冒頭で「**私たちの主、また神よ**」と呼びかけているところにも、深い意図が込められています。当時、ローマ帝国を支配していた皇帝ドミティアヌスは、自らを「われらの主にして神」と呼ぶよう、植民地下にある民に要求していました。それと同様のことばを神に向けるということは、「真の支配者は皇帝にあらず」と宣言していることにほかなりません。栄光と誉れと力を受けるべきは皇帝ではなく神である。そのことが天において高らかに謳われているのです。「受けるにふさわしい」という表現は、排他的な意味を持ちます。この世の権力者が如何に力を増し加えようとも、すべてにまさる神こそがまことの王であるということを、本書は命がけで告白しているのです。

1世紀末、この信仰に立ち続けた人々は弾圧されました。著者ヨハネもパトモス島に島流しに遭い、強制労働に服していた。地上の聖徒の心が折れそうになるとき、同じ信仰に立って歩み抜いた仲間たちがいたことを思い起こさせ、またその聖徒たちが永遠の世界で私たちの傍に立って共に賛美をささげている光景を垣間見せてくれます。大患難時代は近未来に訪れるかもしれません。その時に向けて心備えると同時に、如何なる状況下にあっても賛美を絶やさず、感謝し続けることができるように、主イエスご自身がこの信仰を支えてくださるように祈らずにはられません。

【結論】

日本は第二次世界大戦後、ほぼ半世紀に亘る経済成長を遂げた後、バブルの崩壊を経て、30年に及ぶデフレの時代を歩んでまいりました。現在は原材料の高騰に伴うインフレにより、賃上げを上回る物価上昇によって国民は苦しんでいます。このような状況にも拘らず増税に次ぐ増税を強行している政府は何を考えているのでしょうか。インボイス制度や消費増税がもたらすものは、庶民の更なる貧困化です。子どもたちが給食も食べられない時代になってきているというのに、海外へは惜しげもなくお金がばら撒かれていく。政府の暴走の先に待ち受けている世界に、私たちは注意してはなりません。抵抗する力もないほどに貧しくなった国民を、国が与えるものだけで支配する、共産主義的な世界の実現が目論まれているのです。そのような上層部の企みに対し、私たちは信仰と知恵をもって戦っていかなくてはなりません。心を引き締め、まことの王イエス・キリストがただ一人礼拝されるべき方として天の王座に座しておられ、多くの聖徒の祈りが私たちのためにささげられているということを心に留めましょう。私たちがささげているこの礼拝は、四つの生き物と二十四人の長老がささげる天の礼拝の一つとされている。天に属する者として、神の養いに頼り、栄光を神にのみささげながら歩んでいきたいと思います。

【祈り】

栄光の王、イエス・キリストの父なる神様。この世にあつては、真に礼拝されるべき方が認識されず、御名が貶められた状態にあります。栄光は、人から神に帰されなくてはなりません。主イエスによって贖われ、礼拝者とされたことを感謝いたします。天における壮大な礼拝とともに、この小さき地上の礼拝も力を受けています。この人生に与えられた一回一回の機会を大切に、天に属する者としての生涯を歩みたく願います。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
万物を創造し、良きものをもって世界を養い給う、父なる神の愛、
創造主を認めるところに、感謝をもって生きる道を示し給うた、主イエス・キリストの恵み、
栄光を神に帰させ、地上の礼拝を天の礼拝の一つとなし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。